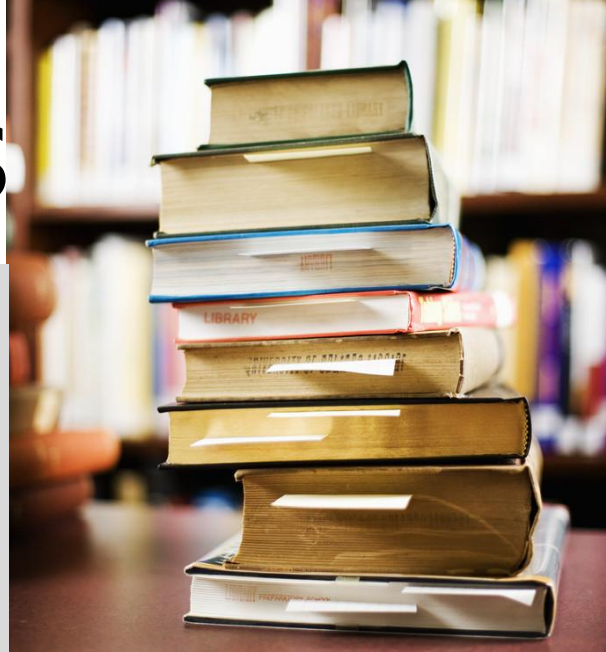


□ブックハンティング収穫本、絶賛貸出中です！

□試験前に再チェック！ **試験直前特集**
—気持ちよく図書館を使うための3ポイント

□私のお薦め本 第5回
高井教授が『理科系の作文技術』『文芸時評』を紹介します。

□図書館からのお知らせ



ブックハンティング収穫本、絶賛貸出中です！



7月17日に行いましたブックハンティングの収穫本を2階エレベーター横にて展示中です。学生が選んだ**96冊**が並んでいます。話題の小説をはじめとして、スポーツ、ドキュメンタリー、ミステリー、SF、詩集、料理などなど、いろいろなジャンルの本がよりどりみどり盛りだくさんです。



もちろん、これらの本は借りることができます。試験勉強の息抜きなどにぜひ手に取ってみてください。

【予告】 次回のブックハンティングは、11月5日を予定しています。お楽しみに!!



試験前に再チェック！ —気持ちよく図書館を使うための3ポイント

9月中旬からいよいよ前期試験が始まります。試験期には毎年、座席不足に対してお困りの声やトラブルが発生します。そこで、既にご存じ（ですよね!）の事ばかりと思いますが、図書館を皆で気持ちよく使うために次の3ポイントをチェック！

荷物は常に自分と一緒に

図書館を出るときは、次の方に**いさぎよく**席を譲りましょう。座席利用カードもお忘れなく。



充電は図書館ロビーの専用ロッカーで

図書館ロビーには自由に使える充電ロッカーがあります。
※充電はパソコンのみです。スマホ・携帯はやめてね。



食べる・飲む—それは資料などの敵！

勉強しながらの飲食は、使っている資料や機器を汚す原因です。周囲にニオイも漂います。「大事なiPadが水没!?!」なんて悲劇を生まないためにも、飲食は図書館ロビーでお願いします。



ピンチの時は助け合い！皆で試験を乗り切ってくださいね。

1. 理科系の作文技術 図・文庫新書コーナー BS/Rik

本書は、理科系の「仕事の文章」—たとえば、実習レポートや試験の答案、原著論文、総説、研究計画の申請書など—を書くときの文章技術の定評ある指南書です。

理科系の仕事の文章の特徴は、著者が序章において述べているように、「読者につたえるべき内容が事実（状況を含む）と意見（判断や予測をふくむ）にかざられていて、心情的要素をふくまないこと」（p.5）にあります。そして、「仕事の文書を書くときには事実と意見（判断）との区別を明確にすることがとくに重要」（p.7）です。これは、何でもなしのようにみえますが実はそれほど容易なことではありません。

かなり経験を積んだ研究者の書いた文章でも、いったん意見として書いたことを、いつの間にか事実として扱ってしまうようなミスが往々にして見られます。それが不都合なのは、「技術報告や科学論文の中でこの種のスリカエがおこなわれると、論理の組立てがぐらぐらになってしまう。不当な結論がみちびきだされることも稀でない」（p.7）からです。

それに続く次の一節、本書を最初に読んだときから強く印象に残っていて、英語で原著論文を書くときなどにも、いつも思い出します。

「ふつう、事実から意見を構成する段階の論理はわりあい単純なものだ。自明の場合も少なくない。そういう場合にはしばしば、自分の意見の根拠になっている事実だけを具体的に、正確に記述し、あとは読者自身の考察にまかせるのがいちばん強い主張法になる。」（p.115）

本書は、1981年9月25日の初版から版を重ね、今年6月の第72版で総発行部数90万冊を超えた由（出版社Twitterによる）。本学の学生諸君の中にもすでに読んでいる人がかなりいると思います。もしまだの人にはぜひ一読をお奨めしたい一冊です。



本書では、まず「仕事の文章」におけるこのように核心的なポイントを指摘したあと、どのようにしたら事実と意見を明確に区別しながら明瞭かつ簡潔に書くことが出来るかを、実例・演習問題を交えながら具体的かつ懇切に説明しています。

特に圧巻は第7章。「事実となにか、意見とはなにか」を詳細に解説し、それらを明確に書きわけける方法について詳述しています。そのあとで「事実のもつ説得力」に言及し、「理科系の仕事の文章に書き込む意見は、事実の上に立って論理的に導き出したものでなくてはならない。その意見を…（中略）…読者に受け入れさせるためには、意見の基礎になるすべての事実を正確に記述し、それにもとづいてきちんと論理を展開することが必要である」（p.115）と言います。

2. 井上ひさし「文芸時評」朝日新聞(夕刊)1981年10月26日(月)-27日(火)掲載の<上><下>二回分 (図・2F 電動書架 朝日新聞縮刷版 昭和56年10月号)

朝日新聞(夕刊)の「文芸時評」欄で井上ひさし(1934~2010)が1.を紹介して激賞した有名な書評です。当時、私は大学を出て2年目でしたが、実は、1.を購入して読んだのは、この書評に感銘を受けてのことでした。

井上氏は、「文科系の文章もまた、考えられているよりはずっと心情的要素をふくむことが少ないのである。作家達の文章上の苦心の大半は、事実と意見だけでどれだけ深く読み手の心と通い合うことができるかに傾注されている、といってもいいぐらいだ」と言います。

その実例として、当時の新刊書、山口瞳(1926~1995)の『酔いどれ紀行』(1981年、新潮社)と、井伏鱒二(1898~1993)『海揚り』(1981年、新潮社)の一節を、プロの手際で見事に引用しながら説明しています。

この書評は、図書館所蔵の「朝日新聞縮刷版」で読むことができます。1.とあわせ、ぜひ一読されることをお奨めします。



図書館からのお知らせ

■夏休み中の節電についてご協力ありがとうございました！

8/20(月)からは通常どおりとなりますが、「机を離れるときはデスクライトを消す」など引き続き節電のご協力をお願いいたします。

■次回のLibrary Newsでは試験にお薦めの本をご紹介します。ご期待ください！